

「従軍看護婦の体験」小暮吉子氏

大正 12 年、岡部村（現在の深谷市）に生まれた小暮さんは、昭和 18 年 8 月、日赤埼玉県支部から召集を受け、呉軍港からニューブリテン島、トラック諸島に渡りました。施設・薬品不足、蔓延する風土病の中、献身的な看護を行った体験をお話いただきました。

第 475 救護班の一員として赴任したラバウルの第 8 海軍病院は、テント張りやバラックで作られた粗末な施設でした。井戸もなく、スコールの水を貯めて使うほど水不足に悩まされました。さらに、デング熱・マラリア・アメーバー赤痢など悪疫が流行し、亡くなった看護婦もいました。空襲があると、トラックいっぱいの重傷の兵士が次々と運ばれました。強心剤のカンフルを使い果たし、40 度を越す高温にもかかわらず、水枕が行き渡らない状況でした。その後、トラック諸島に移りましたが、この地も激戦地となりました。ある日、長官から婦長に看護婦全員の自決用青酸カリを渡されたそうです。婦長はお預かりした大切な娘さんたちを死なせるわけにはいかないと私たちには渡されなかったことを後で知りました。昭和 19 年 7 月、横須賀軍港に引き揚げましたが、船は機雷を受け、傾いたままの入港でした。

品川の元海軍経理学校医務課に勤務となり、ここで東京大空襲に遭遇しました。焼夷弾の直撃を受け、黒い岩のような塊となった遺体や胸に手をあて息たえた遺体など次々と運ばれてきました。まさに生き地獄そのものでした。

小暮さんは、苦しみながら亡くなっていく兵たちや空襲で亡くなった多くの人々のことを忘れることはないそうです。この交流会をとおり、「戦争を知らない世代の人々に、戦争がいかに悲惨なものであるか少しでも伝えたい、そして、平和の尊さと有り難さを知ってほしい。」という小暮さんの願いが参加者に伝わりました。

（この交流会の内容は、「資料館だより」から転載しました。）